
IV
部

パネルディスカッション

進行・パネラー紹介

大田 幸博（おおた ゆきひろ）

学習院大学法学部卒業（史学部所属）。県立大津産業高校教諭、鞠智城発掘調査主任（一九八八年（九四年）～熊本県教育庁文化課課長補佐、歴史公園鞠智城・温故創生館長を経て、熊本県立装飾古墳館長で定年退職。長年、鞠智城跡の調査と整備に携わる。）

パネラー

西谷 正（にしたに ただし）

九州歴史資料館館長

鈴木 靖民（すずき やすたみ）

國學院大學名誉教授。

佐藤 信（さとう まこと）

東京大学大学院人文社会系研究科教授

一 鞠智城の築城時期

大

田..先ほど基調講演を含めまして五人の先生方にお話しいただきました。また、熊本県から矢野が調査経過を申し上げました。

さて、この東京シンポジウム「古代山城鞠智城を考えるⅡ」の準備としまして、各先生方に事前にレジュメの原稿を出していただきました。そこでは、鞠智城の築城時期に関しまして、共通した意見でございました。非常にうれしく思いました。

まず、鞠智城の謎といわれています築城記述がないということに関しましては、今日大宰府と大野城・基肄城と一緒に時期でいいのではないかということで、統一されました。今後これについては、一つの線ができたのではないかと思つております。そこで、この件に関しまして、国書に鞠智城の築城の記述がありませんが、西谷先生、一言考古学の立場から御意見をいただければと思います。やはり大野城・基肄城と一緒にということでいいでしようか。

西

谷..私は、そのように考えております。

大

田..佐藤先生、どうでしよう。

佐

藤..私も、先ほど申し上げたように、同じ時期に建てられたので、同じ時期に修理が必要になつたものと考えております。

大

田..鈴木先生の方は、前提条件付きでございますけど、どうでしよう。

表2 古代山城等関係年表（鞠智城を中心として）

年	月日	出来事（出典）
六六〇（齊明 六	八月二八日	唐・新羅、百濟を滅ぼす。（『日本書紀』卷二六）
六六三（天智 二）	一月	白村江の戦いで倭・百濟軍が敗退。（『日本書紀』卷二六）
六六四（天智 三）	二月	対馬・壱岐・筑紫國等に防（防人）と烽（烽火）を置く。筑紫に大堤（水城）を築き、水を貯える。（『日本書紀』卷二七）
六六五（天智 四）	八月	長門国に城、筑紫國に大野、榛（基肄）の二城を築く。（『日本書紀』卷二七）
六六七（天智 六）	七月二三日	倭國に高安城、讃吉國山田郡に屋嶋城、対馬國に金田城を築く。（『日本書紀』卷二七）
六七〇（天智 九）	五月二五日	長門に城を一つ、筑紫に城を二つ築く。（『日本書紀』卷二七）
六七二（天武 元）	二月四日	（壬申の乱）大海人皇子軍、三尾城を攻める。（『日本書紀』卷二八）
六九八（文武 二）	二月	大宰府に大野、基肄、鞠智の三城を縛治させる。（『続日本紀』卷一）
六九九（文武 三）	二月一五日	大宰府に三野、稻積の二城を修理させる。（『続日本紀』卷一）
七一九（養老 三）	二月一五日	備後国安那郡茨城、葦田郡常城を停める。（『続日本紀』卷八）
八五八（天安 二）	閏一月二四日	肥後國が言。菊池城院の兵庫の鼓が自ら鳴る。二五日、又鳴る。（『文德実錄』卷一〇）
八五八（天安 二）	六月二〇日	肥後國の菊池城院の兵庫の鼓が自ら鳴る。同城の不動倉十一宇が火（焼）く。（『文德実錄』卷一〇）
八七五（貞觀 七）	六月二〇日	大宰府が言。島数百群が菊池郡倉舎の葦草を噬み抜く。（『三代実錄』卷二七）
八七九（元慶 三）	三月一六日	肥後國菊池郡城院の兵庫の戸が自ら鳴る。（『三代実錄』卷二五）

鈴

木…直接の証拠があるといいですが、類推と

いうことで天智四年、六六五年になるのだろうと思います。何故かと申しますと、『日

本書紀』に筑紫国に遣わして、と憶礼福留と泗沘福夫のことが出てきて、大野城と基

肄城の二城を築かせたとあります。鞠智城は、佐藤先生の資料にもあつたように、八

世紀になつても肥後でなく「肥」と呼んでおりますので、これをどう整合的に説明す

るか、クリアにするかだと思います。そういうことは、まだ問題としてあると思つて

います。

大

田…笠山先生も同じような意見でございますので、今回のシンポジウムの中で鞠智城の築城時期というのが国の歴史書に載つておりませんが、大野城・基肄城と一緒にことで、今後進めていきたいと思います。



写真22 パネルディスカッション(1)

二 鞠智城の役割

大田：次に、鞠智城の地理的な位置でございます。位置としましては、有明海の沿岸といいますか、菊池川の河口から三〇キロメートル遡ったところにあります。本日の五百旗頭先生からは、それはないだろとお話をございましたが、これも期せずして他の先生方は全員同意見でございました。

唐と新羅の連合軍の本体が倭、当時の日本に侵攻する時には、まず博多湾に入るでしょうが、その他に、有明海に回り込むような場合も想定できるのではないか。そのため造られたというふうな意見がありました。先生方からは、有明海は、グローバル的に非常に大事なものであるというようなお話をいただきましたので、これについては非常に力強く感じました。この有明海の沿岸に築かれた理由といいますか、そういうものを再度先生方にだめ押しをお願いしたいと思います。西谷先生よろしくお願ひします。

西谷：古代の五～六世紀からですね、有明海に注ぐ菊池川流域の地方豪族は朝鮮半島に目が向いていた、交流があつたということです。

時代は新しいんですけど、一五世紀の後半に、菊池川流域の菊池氏が北部九州にすいぶん大きな勢力を張る時期があります。その菊池氏は、当時の朝鮮王朝、李朝と交流をもつているんですね。何と三〇回も使者を送っています。それは高麗の古い梵鐘とか大藏経などを

鞠智城の役割

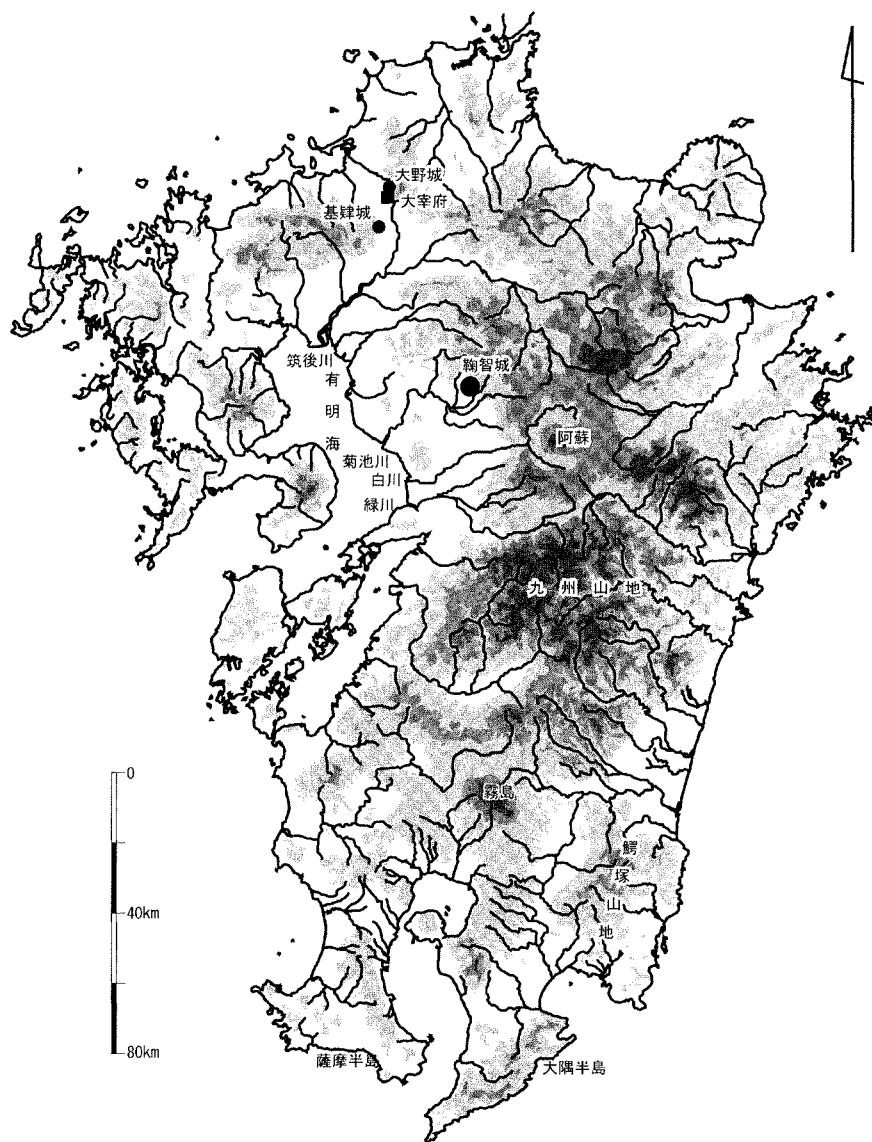


図 19 鞠智城の地理的位置

入手したり、あるいは経済的な交流を行っています。そういうわけで、古代だけではなく、中世にも、菊池氏は菊池川河口の玉名市の付近に高瀬の港を持つていて、そこを拠点として、経済活動、経済面での交流をやっていたというように、その後の歴史にも続いていくんですね。ですから、当時の交流というのは、国家レベルと地域レベル、国家レベルの交流が国際外交とすれば、地域レベルの交流は民際外交とでもいいましょうか、そういう二面性があつたと思うのです。そういう意味で、ウェイトはもちろん、北の大野城や基肄城が中心でしちゃうけれども、第一義的には同時に鞠智城もと考えております。

もちろん、時代が九世紀まで記録にも出てくるし、遺跡も残っているということですから、途中で機能というか、役割は変わってくると思うんです。それが南島に目が向く、その過程で、鞠智城の南方対策としての拠点という性格が付加されていくんではないでしょうか。これは昨年ここで、大宰府系の土師器が奄美大島の東の喜界島で出ているという話しがあつたようですが、そういうこととも関係していくんですね。

先ほど話しませんでしたけれど、加耶の阿羅加耶が滅んだ時にあつた山城が、後に新羅の山城になりますね。そういうかたちで途中で新たな機能が加わつたり、変わっていくことはあると思うんです。しかし、第一義的にはやはり白村江の敗戦が大きな切つ掛けで、大野城・基肄城、そして有明海に面して鞠智城という、そういう位置づけだと思います。

大田：鈴木先生の方からは、東アジアといいますか、東ユーラシアといいますか、非常に大きな視点で鞠智城を眺めなさい、というような御指摘をいただきました。それと関連しまして、

その有明海近くに位置することについて、一言お願いします。

木..文献では、『日本書紀』

の敏達十二年の、西暦

五三八年の日羅の記事は

大変重要なものです。六

世紀代の火葦北国造、つ

まり後の肥後の有力豪族

が軍隊を率いて朝鮮半島

の加耶か、百濟か、多分

百濟に渡つて、その現地

の百濟人の女性との間に

できた子どもがこの日羅

であると推測されます。

日羅は、百濟で成長して

百濟の王権の、政権の役

人になつたという想像が

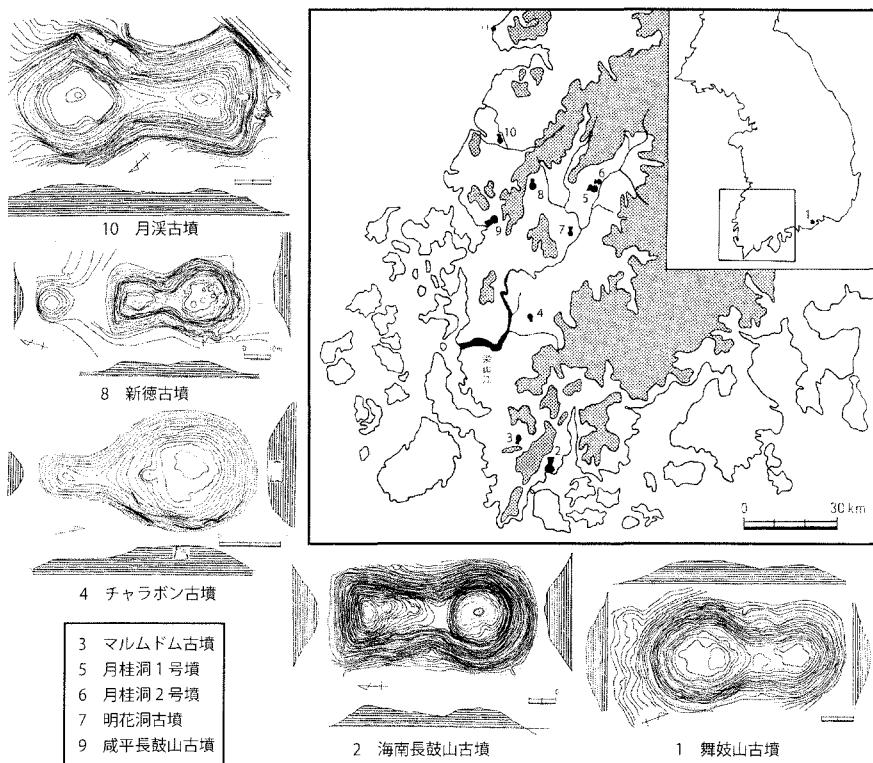


図 20 韓半島の前方後円墳とその分布

(岡内編 1996 所収の挿図を配置・作成)

可能です。

さらに私は考古学者の西谷先生が話されるべきかと思いますが、五世紀末から六世紀の初めに韓国の全羅南道の榮山江流域に二三基の前方後円墳の形をして、段築もあつたり、簡単な埴輪があつたりする墳墓があつて、学界内外で話題になつております。その内部構造が研究されて、その中に「肥後型」と呼ばれる構造を持つてているものがあり、熊本県の地元の方々に對して釈迦に説法ですが、墓の内部に入ると奥の方に施設があるものもあるのです。それ以

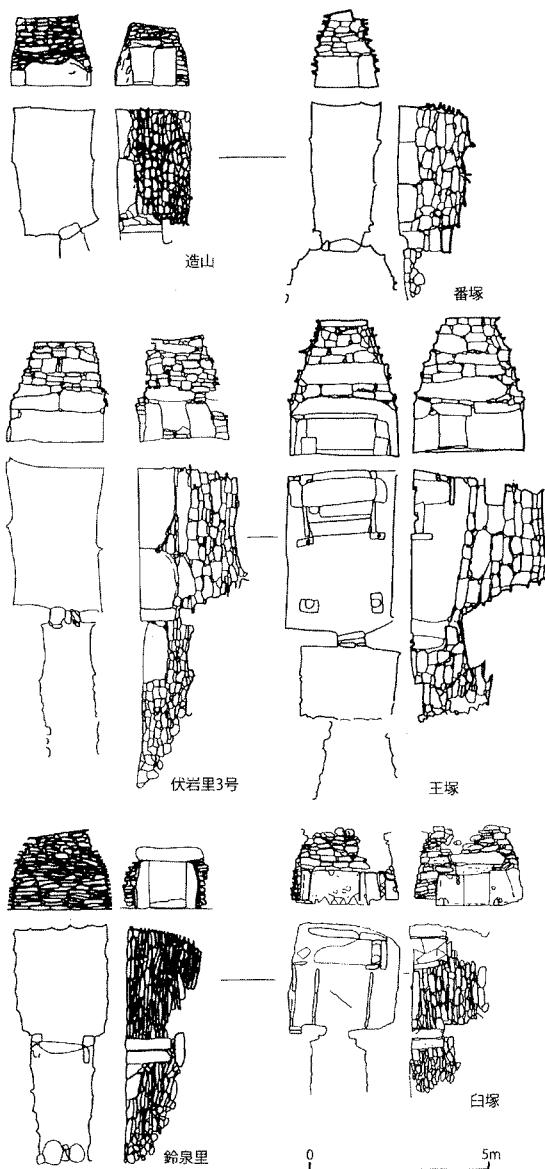


図 21 北部九州・肥後と韓半島の石室比較

(柳沢 2001 より転載)

外にも北部九州のタイプのものもあります。これらは墳墓の築造の技術を持つた人が日本列島というよりも、肥後の辺りから朝鮮半島の、韓国の西南部に行つたことを示すものでしょう。

彼らがだれかということはいろいろ説がありますが、これは明らかに、肥後と朝鮮半島の西南部を結ぶ交通・交流、つまり交通の道があつて、そのルートは有明海なり、八代海なりを通ると考えないと成り立たない。現代の我々はどうしても北部九州で玄界灘の交流を考えがちですが、やはり有明海の対外交流ということが重要ななるのではないかと思います。

それで、先ほど佐藤先生にお話いただいた、モンゴル襲来の時の高麗軍と江南軍のように、江南からやつてくるか、どこからやつてくるか、わかりませんが、江南だとすると、揚子江の流域ですから、まつすぐやつて来たら、有明海に入つて来る可能性が高いと考えられます。日本は唐に対しては、ずっと脅威を感じていたし、天智二年、六六三年、実際酷い目に白村江であつたわけです。新羅に対しては、何にも問題がないかというとそうでもないと思いますが、新羅とはうまくやつていたと考へると、肥後の重要性というか、これは、五百旗頭先生のご専門かもしれません、地政学的なことを考へれば、有明海方面の意味を決して低く見るべきではないと思います。

大田：一般的に有明海は、ローカル的にみられますけれども、グローバル的な見方も必要ということですね。ありがとうございました。佐藤先生、有明海にも烽のネットワークとおつしゃいましたが、それにつきましてちよつと補足をお願いしたいと思います。

佐藤：おそらくこれは灰塚のところ、鞠智城内の西側に非常に眺めの良い灰塚という高まりが

あつて、そこに登ると烽が置かれたと考えられる「日の岡」がよく見える、ということに連れていっていただいたことがあります。それから矢野さんのスライドでもついぶんあちこちの山が見渡せるということですので、これは烽のネットワークの中に鞠智城が必ず位置したと思つております。ただ、ネットワークというのは、繋がらなくては意味がないので、灰塚から「日の岡」が見えるのであれば、そこから北に行けば必ずて、「ヒノヤマ」だとか、「トビヤマ」だとか、「トブヒヤマ」だとか、烽が置かれた山が連なっていくのではないかと思います。私、そちらの地理の方は詳しく検討しておりますけれども。

また、菊池川の河川交通というものが、おそらく鞠智城の場所を考える上では、重



写真 23 パネルディスカッション(2)

三

鞠智城と西海道

要ではないか。また陸上交通で、おそらく大宰府から南の薩摩の方に向かう道と、おそらく途中で豊後の方に分かれる東西交通、その南北交通と東西交通の交点の場所に近く、鞠智城が立地しているというように捉えています。

それから、古代の朝鮮式山城の中に、『日本書紀』などの六国史に載っていないものでも、吉備の鬼ノ城などという、大変雄大な、立派な山城がありますが、あれも吉備の生産地をその背後から押さえる、護るような場所に築かれております。山城は必ずしも最前線に築くといふばかりではなくて、むしろ山城というのは、稲穀を貯えておいて、そこに籠つて護るタイプの防衛施設ですから、戦略・戦術上と同時に護る対象が近くになくてはいけないと思います。吉備の場合は、吉備の大豪族が存在した地域である吉備の生産地、それを後ろから護るような、あるいは逃げ込めるができるような場所にある。逃げ込む城でありますから、逃げ込む有力な人々がいなくてはいけない。地方豪族がいて、そこは有力な生産地である場所に山城をきずき、そこに逃げ込む。しかもそこには、白村江の後、緊急にすぐにでも米をたくさん貯えなくてはいけないわけです。そういう生産力がある場所でなければ、なかなか山城を営めないということです。

そういうことを考えていくと、鞠智城が理解しやすくなるのではないかと思つております。

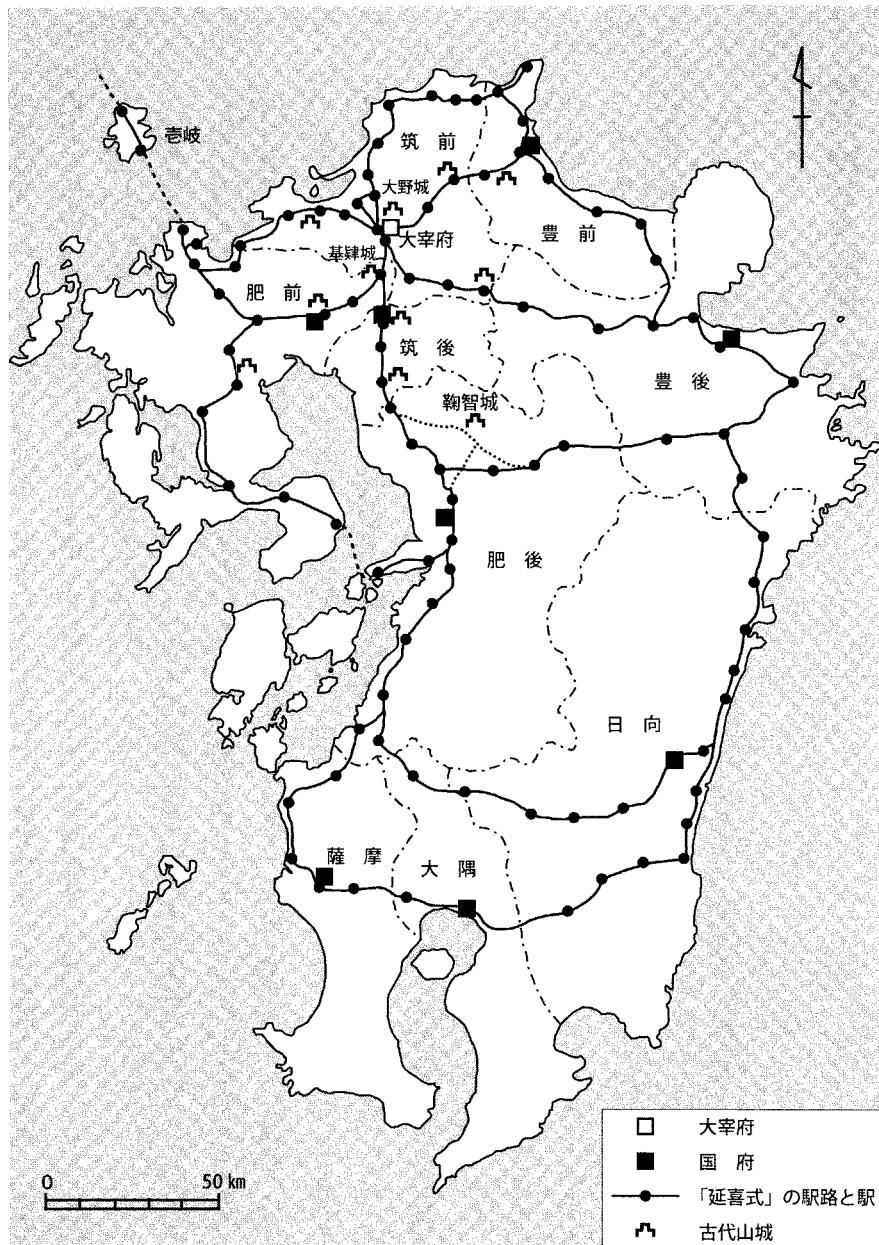


図 22 西海道の国と駅路

大田・西谷先生は、「東アジアの中の古代山城」ということで、鞠智城についてお書きになつてあります。

意図的に、時間の関係で外されました。が、笹山先生も講演の中で触れられた西海道の駅路について補足をお願いしたいと思います。

西谷・私は、その辺を詳しく調べておりませんけれど、先ほどもちらつと申しましたように、おそらく八世紀の後半以後、九世紀にかけてですね、西海道全体の掌握を徹底するというか、さらにはその南の多楠、掖玖とか、南島まで視野に入れて、進出して行く時の拠点というか、そういう性格を帶びていくんではないかと申したわけですが、それ以上のことはございません。

大田・佐藤先生、隼人対策も含めてお願ひいたします。

佐藤・隼人との関係については、私は、最初の築城はやはり有明海に面した防衛に焦点があつたということだと思いますけれども、その後隼人との緊張関係がクローズアップしてきた時代に、やはり鞠智城が機能したということは十分想定できる。私が御紹介しましたように、薩摩国に肥君が郡司として出張つているというか、存在しているということも含めて、おそらく大宰府から物資を薩摩に運び込む時でも、途中兵糧として鞠智城に貯積されている大量の稲穀が頼みにされた、ということは十分考えていいのではないかと思います。

大田・第二点の問題点としまして、鞠智城の位置的な問題につきましては、有明海沿岸に存在するということは、グローバルな意味での存在価値があるということでした。またプラスアルファ、烽の問題も絡んでくるということでした。それから西海道の駅路など、いろいろな関係を含めて、南の押さえの拠点ということでの位置付けもあるうということでした。ただ

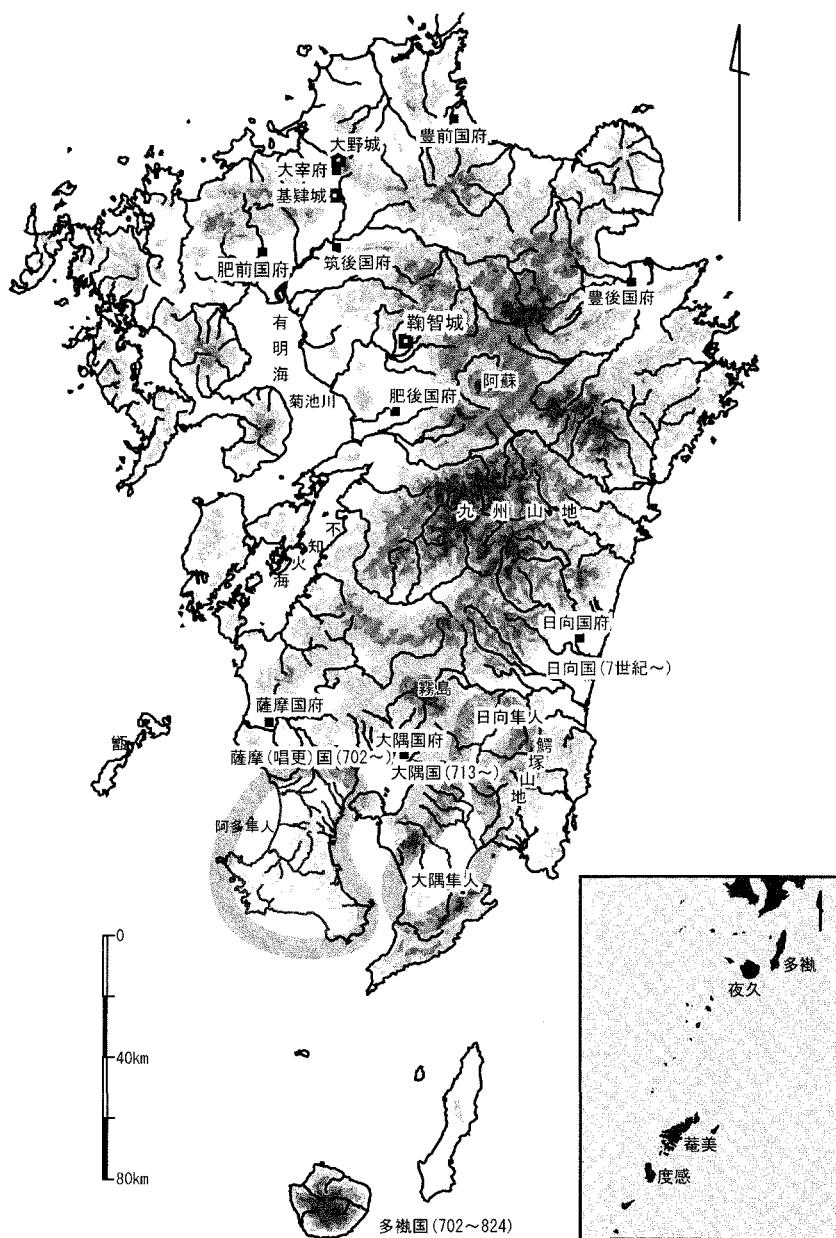


図 23 古代の西海道

し、築城に関しましては、先生方の共通的な意見は、いわゆる東アジアの国際情勢の緊迫化によつて造られたものということでした。つまり、後に性格が変わつていつたというふうに考えて良いだらうということでした。

四 白村江の敗戦と日本律令国家の確立過程

大 田一では、鈴木先生には、びっくりするようなお話をいただきました。古代山城が唐と新羅の連合軍が攻めてくるのではないかという話がある一方で、いや新羅と友好関係にあつたのだとぞ、二つ一緒にしてはいけない、とおっしゃいました。もう一度念押しをお願いしたいと思います。

鈴 木…これは、九月の末に岡山県の鬼ノ城のシンポジウムで基調講演を頼まれていますので、鞠智城の矢野さんもご一緒にするのですが、その時に取つておきたいのですが。

ちよつと雑談になりますが、私の四十年前の研究のスタートは、古代の新羅との関係史です。その頃は中国の隋唐の外交というか、国家間の関係がすべてで、新羅関係の研究がなされてなかつたのです。六世紀、七世紀、八世紀は、日本の古代文化、国家制度も含めて、当時の支配者たちは日本の立場で選択して、日本で受け入れられるもの、そうでないものと、今日風にいえば、仕訳をして、それで日本の文化を作つていこう、あるいは日本の国家を作つていこう、という方向で行われただらうと思ひます。

そういう中で、六六〇年に百濟が滅び、六六三年に救援の戦争に失敗する。主に戦った相手は、唐で、唐と戦っているのです。それで、五百旗頭先生が言われたように、とにかく特攻隊と同じで、日本軍はすつと囮われて、いるのに突撃していったのです。しかも小さい船です。それから他の先生も言われたように、豪族たちの軍隊はバラバラです。つまり、話す言葉もそれぞれの人が違いますので、指揮命令も分からぬという状態でしたから、結局それで敗れて、百濟は無くなつてしまつた。だから、今まで文化を享受してきた国が無くなつたわけです。五世紀以来、百濟とはすごく関係が深いです。そうしますと、あとは新羅、高句麗がありますが、高句麗も間もなく唐・新羅に滅ぼされていく。そして唐と国交を回復します。唐が百濟を占領していた間に、遣唐使が二回行くのです。しかし、長安などの都には行きません。唐との国交は断絶します。

あと残っている国は、国交回復した新羅だけで、六六九年からは、新羅以外は付きあつてくれない。その中で日本は、改めて、その敗戦から立ち上がり、新しい国作り、文化作りをやつていかなくてはいけない。新羅とは、お互いの公的な使節の往来はあつて、二年に一遍は必ずどちらかが行く。二年足らずで必ず一度は交流があるのです。それから唐にいた留学生や捕虜たちも、新羅経由で帰つてくるのです。新羅経由で帰つてくる人たちは、新羅の国家作りというか、いろんな文物制度を見たり聞いたり接したりしているのです。

そういうことで、結局我々研究者が重視している、日本の古代国家が立ち上がる時期は、諸説ありますが、もつとも有力なのはご存じのように、七〇一年大宝律令の制定です。それ

から遣唐使がその時に任命されて、翌年、七〇二年に行くので、その間三〇年間余り、まったく唐のものに直接触れる事はないのです。そうすると新羅の国家的な制度が、いわば現実の参照系、参照する体系になるわけです。

何年か前に、佐藤先生に頼まれて、東大の史学会でお話して、山川出版から本になっていますが、そこでも一応まとまつたことを書きました。そこで山城の造営についても、その前提となる唐・新羅連合軍という言い方をあらためて区別して考えた方が良いのではないだろうかと思います。結局、唐の律令法典を手に入れたのはいつか、という大きな問題があります。百濟の役の前、六五九年に遣唐使が行っていますから、そこまで遡るのです。その時と今日問題になつてている山城が造営され始めた時期とは、同じ時期です。というように考えると、唐と新羅との関係を区別して考えた方が理解しやすい、説明しやすいと思うのです。

佐 大

田・佐藤先生、どうでしよう。

藤・私も鈴木先生と同じ考え方で、七世紀の後期の三〇年間は、遣唐使は一度も唐に行つていないです。七〇一年に任命されて、七〇二年に渡つた遣唐使が、初めて日本という国号を持つて久しぶりにいくわけですが、向こうでは以前は倭という国がやつてきただけれども、日本とはどこの国かということで、いろいろ質問されることがあります。このように、三〇年間唐に直接使者を派遣しない間に、新羅との間では密接な遣新羅使の派遣と、むこうからは遣日本使がやつてくるという関係がある中で、日本律令国家の確立過程という歴史が動いてきた。これは、重視しなくてはいけない。

美術史の方と話していると、七世紀後半に唐のものが直接倭に渡つてきていると言われる。それぐらい日本の白鳳美術は、唐のものをそのまま模して作つてゐるんだということを言わるのでですが、実は七世紀後期の三〇年間は日本から遣唐使は派遣していない。ということは、私は注目しなくてはいけないと思います。

ただ、それと同時に、補足で申しますと、白村江の戦いは、唐・新羅の連合軍と戦つて倭が負けたのですが、その直後には唐の派遣軍からも友好的な使者が倭に来て、新羅からも友好的な使者が来て、「仲良くしましよう」とむこうからやつてくるわけですね。これは、唐・新羅が半島の制圧後にお互いに対抗しはじめることがあります。

唐としては、漸く高句麗や百濟を倒して、占領地は自分たちの血を流した、自分の領地だと思つてゐるわけです。一方で新羅の方は新羅で、漸く三国時代以来の旧敵をやつつけたのに、それが唐の領土になるというのはちょっと面白くない、ということがあります。最終的に、新羅が、金春秋という、今日五百旗頭先生のお話に出てきた優れた国王の采配が凄かつたと私も思いますけれども、唐には頭を下げながら上手に唐軍を全部鴨緑江の北に追いやつてしまふ、ということを実現した。

倭の貴族にとつては、地方豪族もそうですが、徹底的に負けて、慌てて中央集権国家を作らなくてはいけない、ということを認識した一方で、戦争に負けたのに、あたかもその直後は負けていなかつたかのような状況になつてしまふ。ということで、倭国、そしてのちの日本の古代貴族は、新羅に対する優越感を持つてしまつた。客観的にそうであつたわけではな

いのですが、そういうこともついてお話ししておきたいと思います。

大田：まあ、古代山城を古代国家形成の一過程として見なさいというですね、鈴木先生の御提言は、非常に興味あるものとして受け止めたいと思います。

五 古代山城の二面性

大田：それでは西谷先生、鞠智城のことに関しまして、ありがたいお話をうかがえたのですが、その中で、朝鮮半島のお城との共通性についてお話をいただきました。例えば、山城と平地城ですね、この二面性を持つた鞠智城をクローズアップされました。が、そのところをもう一度お話し願えませんか。

西谷：端的に申しますと、大野城、その南麓に都府楼の名で親しまれる大宰府の政庁がある、というように、平地城と山城がセットの関係で存在し、それが高句麗をモデルにしているんではないか、と申したんですね。それに対して、鞠智城の場合は、平地城と山城とを兼ね備えた、そういうものではないでしょうか。それは百濟の後期、さらに中期、つまり公山城や扶蘇山城にモデルがあるんではないか、と申したわけです。そういうことで、鞠智城に関しては、百濟との密接な関係ということを言いたかつたわけです。

大田：そうしますと、鞠智城を単純に古代山城と言つておりますが、そんなに簡単に片付けられないということがわかりました。先生の御指摘なさつた、二面性を持っているとか、貯水池

が出てきているとか、あるいは八角形建物が出てきているとか、そういうしたものに対しまして、やはり鞠智城は、特筆されるべき点があると受け取つていいでしようか。

西谷：もちろん、概念的というか、大局的にそういうことであつて、細部にわたつては、地域性が出てきますので、そういう共通性と違つていうのは、当然あると思いますね。

六 ユーラシアの中の東アジア

大田：鈴木先生には、グローバルなお話をいただきました。まあ鞠智城というものを、九州あるいは西日本地方だけで理解するのではなく、それ以上の大きな広がり、中国を含めた、ユーラシアにまで広げた発想で考えなさい、というお話をしました。ちょっと補足をお願いいただけますか。

鈴木：日本の歴史をユーラシアにまで広げる考え方には、まだ学界で、市民権を得ていません。せいぜい大学院生に話しているくらいです。つまり、私は、本属は日本史ですけども、中国史、朝鮮史、その他を齧つて広域の歴史を構想しているわけです。

それから山城は、一〇年以上前までは、九〇年代に数えた時は六〇ぐらい歩いています。山城は、大小さまざまです。韓国は、一〇年くらい、いろんな科研費や財団の助成金をもらって、朝鮮史や考古学の先生たちに付いて回りましたし、北朝鮮は知らないですが、高句麗は遼東半島にもありますので、遼東半島の山城も調査しました。先ほど西谷先生の写真にあつた竜潭山城は懐かしいです。二十数年前、私が吉林大学に留学していた時、吉林市に何回

も行きました。一番北の高句麗の山城です。高句麗は、あそこまで進出しているのです。

それからロシアは、渤海、女真ですが、中国の黒竜江や吉林省も訪れましたが、ロシアには九〇年代中頃から考古学の田村晃一先生に付いて遺跡巡りや発掘現場があるので、十数年通いました。女真の山城もいろいろ見たり、考えたりしました。私の体験的なところからみると、構造上いろんな類型とか、パターンとかがあり、どれが基本なのか、どれを基本とするのか、それ以外はその変形というか、バリエーションかという抽象的な言い方をしておりますが、日本の山城も考えていくべきだと思つていました。

何しろ文献の古代史をやつておりますので、それ以上のことはできないわけです。ですから、司会の大田先生の御質問とそれますけれども、日本の山城の研究、調査をなさつている方は、朝鮮式山城と呼び、それと今日ほとんど議論にならなかつた神籠石系山城と二つ並べるのです。しかし、そういう言い方で良いのか。つまり、日本の古代の山城なのだから、これは日本式山城というべきではないか。そういうこともこの鞠智城シンポを切つ掛けに、ここから発信していくことが必要ではないかと思つています。

それから私は、東アジアはもちろん大事ですけれども、東ユーラシアの広がりの中で実は意識すると、しないとに係わらず、歴史の大勢としては、その中にあると申しました。中国史の研究者は、中国史では東アジアなどは大して重要でないと言われるのです。

中国にとつて、唐にとつて大事なのは、北方とか西方だと。そもそも唐を建国した李世民は、実は漢族ふうの姓であり、名前であるが、本当は塞外民族とか、遊牧民族の出自だといわれ

ています。唐代の社会はコスモポリタン、コスモポリタニズムであることもそれと関係あるというの、代表的な中国史の研究者の意見です。そうすると、東の方は、ほとんど考慮されていない。それももともと見方だなという気もしないでもない。

ですから、それを乗り越えて理解するにはどうしたらいいかとすると、やはり東部ユーラシアと中国史の方が言つておられ、私は、東ユーラシアと言つておりますけれども、そういうスケールの中で日本の歴史も、朝鮮半島や渤海なども含めて、東アジアの社会や歴史を考えた方が分かりやすいだろう。そうすると、距離的に近いとか遠いではなくて、中国を核にして弧を描いていくと、思わぬところで繋がるのです。高速道路じゃなく、外環道と同じです。直線で行つたら遠いけれど、ぐるっと回つて行つたら早く着くとか、繋がっているとか。こういう考え方はどうだうと思います。

次いでに言いますと、中国史の中には、ユーラシアではなくて、アフロユーラシアということで考え方とする人もおられます。『長安の都市計画』という本を書かれた妹尾達彦さんです。こういう方さえ出ておられる。妹尾さんは、その本の初めのところを見ますと、学生の時にユーラシア大陸を車で横断しているのです。こういうようなスケールで日本史を考える。その場合、山城、とりわけ鞠智城、鞠智城はいろんな要素があつて、たいへんおもしろい、興味深いです。「日本の中の百濟」などというギャッチコピーを誰が付けたのか知りませんけれども、これはすごく良いと思います。

そういうことも含めて、鞠智城からものを考えるというのは、日本の歴史を考えることに

七

鞠智城研究に期待するもの

もなるし、東アジアも考えることにもなるし、あるいは東ユーラシア規模まで広がっていく、その一つの定点になるかもしれないと思つてゐるので、考えていることをお話ししたわけです。

大

田..最後に鞠智城研究に期待するものとして、先生方におうかがいしようと思いまし
たが、鈴木先生にはお話しいただきまし
た。西谷先生いつも御指導ありがとうございます。鞠智城に対して、メッセージをお
願いしたいと思います。

西

谷..今の鈴木先生のお話しに関係するんで
すけれど、私自身、日本の弥生文化のこと
を勉強していたのが、弥生文化を理解する
ためには朝鮮、朝鮮のことが分かるためには



写真 24 講演者・パネラー（発表者）

は中国、というようなかたちで、とうとうシルクロードをずっと西まで行つてしまつたんです。そういう意味では、ユーラシア大陸の中で見ていく、というお考えは、まったく私も同じでございます。同時にまた、東シナ海から日本海、瀬戸内海を東地中海というふうに見立てまして、「東地中海のクレタ島—壱岐—」というテーマで話したことがございます。まあそういう見方もあるんではないかと思っておりますので、今の鈴木先生のお話しではあります。が、日本の中の百濟、あるいはアジアの中の百濟、鞠智城というようなかたちで、やはり広い視野で、そしてまた国内はもとより大陸、韓国とも連携しながらですね、ますます鞠智城の解明、あるいはまた、その重要な意義の発信に努めていただければなあ、と願つております。

大田：ありがとうございます。佐藤先生、よろしくお願ひいたします。

佐藤：今日のお話の中でも、東ユーラシアという話もありましたように、日本古代史を考える時、あるいは鞠智城、熊本県の古代を考える時でも、大変視野が広がつてきています。今日、グローバル化の時代といって、地球の反対側で起きた事件や戦争が、私たちの生活に密接に関係していることを、私たちはよく知っているわけですが、私は、古代でもそれに似た状況だったのではないかと思っております。古代の鞠智城を考える時でも、ユーラシアの、あるいは鈴木先生のいわれる弧状の反対側の出来事と密接に結び付きながら、日本の歴史も営まれていたということかと思います。そういう意味では、広い視野から鞠智城の多様な機能、多様な性格を考えるべきだと思います。いろいろな視角から鞠智城を見直す必要があると思いました。

大

もう一つは、私はグローバルなだけではなくて、どなたかが「グローカル」という言葉をいつておりました。ローカルな視点も大事だと思っています。私はこうした造語はちょっと使いたくないのですけれども、グローバルと同時にローカルであることを重視したい。こちらの肥後地域の地方豪族の目で見ると、鞠智城はどうなるか。古代の火（肥）君の話を今日申し上げたわけですけれども、けつして井の中の蛙ではなく、古代からグローバルなものに目を向けていた豪族が肥国にいたと思つております。東アジアからと地域からと、その両方の視座から鞠智城をこれからさらに明らかにして、歴史的な意義を探つていただきたいと思います。

田.. 今回の鞠智城のシンポジウムに関しましては、「東アジアの中の古代鞠智城」というテーマで、先生方には、グローバルな捉え方をしていただき、非常に貴重な御意見を賜りました。特に、地理的な位置では、なぜ有明海の沿岸にあるのかということについて、これは単なるローカルなものではなく、東アジアを向いているというふうなお話をいただきまして、その中で鞠智城を考えなさいと御指摘いただきました。それから古代山城ですから、東アジアの国際情勢の緊迫に基づいて造られたものですが、後に変化していくて、西海道にあつて、隼人対策とか、南島対策とか、そういった面でも役割が変化していくたのではないか、ということでした。矢野が報告しましたように、現時点では、建物の変遷がⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期に分かれるとしております。今後、鞠智城の建物変遷をさらに具体的に追求する中から、その具体像が理解できるようになるのではないかと思つております。

本日は、パネラーの先生方、筆山先生、五百旗頭先生、ありがとうございました。

出典・参考文献

- 東 潮・田中俊明 一九八九 『韓国の古代遺跡（二）百濟・伽耶篇』中央公論社
- 石松好雄・桑原滋郎 一九八五 『古代日本を発掘する四 大宰府と多賀城』岩波書店
- 大田幸博 二〇〇九 『鞠智城跡の調査と整備』『東京シンボジウム 古代山城 鞠智城を考える』国指定史跡「鞠智城跡」の歴史的意義と課題』熊本県・熊本県教育委員会
- 岡内三眞編 一九九六 『韓国の前方後円墳—早稲田大学韓国考古学学術調査研修報告』雄山閣出版
- 吉林省文物考古研究所・集安市博物館 二〇〇四 『国内城—二〇〇〇～二〇〇三年集安国内城与民主遺址試掘報告』文物出版社
- 熊本県・熊本県教育委員会 二〇一〇 『鞠智城東京シンポジウム 古代山城鞠智城を考えるII 東アジアの中の古代鞠智城』
- 熊本県・熊本県教育委員会 二〇一〇 『鞠智城東京シンポジウム 古代山城鞠智城を考えるII アジアの中の古代鞠智城 鞠智城の調査成果』
- 国立扶余博物館 二〇一 『百濟武王』国立扶余博物館
- 笛山晴生監修 二〇一〇 『二〇〇九年東京シンポジウムの記録 古代山城 鞠智城を考える』山川出版社
- 柳沢一男 二〇〇一 『全南地方の榮山江型横穴式石室の系譜と前方後円墳』『朝鮮学報』一七九輯 朝鮮学会